

学校教育目標		高い志をもち 夢の実現に向けてたくましく生きる児童の育成	
経営理念	使命・存在意義	学校に関わる人が幸せになるための仕組みになる。人が輝き、心が動く学校を創る。大切な人に誇れる学校であり続ける。	
	中心価値・行動規範	Act Boldly ■大胆に行動する Build Equal Trust ■信頼し、信頼される Create the First ■はじめてをつくる Do a Professional Work ■プロフェッショナルであれ Express as a Team ■チームとして取り組む	
現状と今年度の重点		<p>本校はこれまで、「広島県小学校教科担任制推進事業」「広島県小・中・義務教育学校生徒指導サポート実践校事業」の指定を受け、学習指導と生徒指導を両輪として実践的な研究を進めてきた。学習指導では、TKFモデル「T・創る」「K・語る」「F・振り返る」を児童主体の学びを促す授業研究の枠組みとして国語科に援用し、児童の思考力・表現力が高まりを見せるなど、有用性を確認している。また、生徒指導では、課題を有する児童への個別の指導や、言葉掛けや支援の仕方等を工夫して中間的集団を育てた結果、生徒指導上の課題は減少している。しかし、学習指導では、国語科で培った対話活動を他教科等に広げる取組や、算数科の活用課題があり、生徒指導では、児童の自己を生かしていく態度や自尊心が十分に高まっていない状況がある。</p> <p>さらに、教職員が、「十日市らしき」である文化を創る意識や、学校に関わる全ての人を尊敬し「人間性」を高める働き方など、継続的に組織開発を進める必要がある。令和3年度の取組を検証し、本年度は、次の5点を重点事業、5点を推進事業として研究を進める。</p> <p>(重1)学力向上充実事業 児童の思考の流れを繋ぐ、TKFモデルの活用と充実 (重2)家庭学習充実事業 量から質への転換と、児童の学び方の支援 (重3)体力づくり充実事業 基礎的な体力の向上と、縄跳び等の達成型スポーツの導入 (重4)生徒指導充実事業 いじめ・不登校等への対応と、公共の精神を高める自律への指導 (重5)働く人支援充実事業 心理的安全性の高い職場づくりと、自他を大切に作る働き方</p> <p>(推1)特別支援教育推進事業 特別支援教育の視点をもった授業づくり・学級づくり (推2)教科担任制推進事業 各教科の学力の向上と、学習指導・生徒指導に係る組織的な学年経営 (推3)授業づくり推進事業 話し合いのコツの改善・更新とファシリテーション技術の向上 (推4)学級づくり推進事業 ソーシャルスキルの活用と、褒め方・叱り方の理論と実践 (推5)業務改善推進事業 分掌部会・学年会の整量化と、対話とフィードバックによる改善</p>	

評価計画				自己評価						取組指標(目標を達成するための手立て)	評価結果の分析・達成状況	来年度へ向けての改善方針		
中期経営目標	短期経営目標	担当	達成目標	成果指標(効果を見取る目安)	目標値	8月		1月						
						達成値	達成度	評価	達成値	達成度	評価			
確かな学力	指導の個別化により、基礎的な知識・技能を習得させ、「書くこと」を重視し思考力・判断力・表現力を育成する。	ICT	基礎的な技能を身に付け、文章の内容を読み取ることのできる児童を育成する。	国語科「読むこと」領域のテストの達成率80%以上の児童を85%にする。	80%	67%	83%	B	80%	104%	A	○様々な形式の初読の文章の読み取り問題に取り組みせ、読み取りの視点を活用し、論理的に考える指導を計画的に進める。 ○表現力を高めるために、アウトプットの質を意識した学習を展開し、成果を実感する実効性の高い学習を進める。 ○児童個々の認知スタイルや各教科等の特質を踏まえた、個別最適な学習に児童がtrial and learnするための助言を行う。	・国語科「読むこと」領域のテストの達成率80%以上の児童は全体では80.4%だった。1年生94%、2年生95%、3年64%、4年78%、5年80%、6年82%だった。前期と比較すると、67%から80%と向上した。どの学年も向上が見られ、学校全体で取り組んでいることを継続して行った結果だと思われる。 ・ブロックによる授業研究を2・3学期合わせて、3回実施した。 ・「授業では、友達と話し合うなどして自分の考えを深めたり広げたりしている」という児童が、全体で88%だった。学年別では、1年生79%、2年生92%、3年生97%、4年生88%、5年生89%、6年生98%だった。前期と比べて、全体で17ポイント向上し、学年別では3つの学年で2〜4ポイント向上した。年間を通して積み上げてきた結果だと思われる。	・前期67%から後期80%と向上が見られた。どの学年も向上が見られ、学校全体で取り組んでいることを継続して行った結果だと思われる。今後朝ドリルの時間を活用し、読み取り方の指導や初読の文章に慣れていく指導を継続して行うと共に、短時間で読み取る指導も行っていく。 ・年度当初に話し合いのコツに関する理論研修を行う。また、夏休みの研修で、児童に話し合いのコツを見つけてさせるための台本作りを行っていく。
			自分の考えを交流するためにICT機器を効果的に活用できる児童を育成する。	アンケート「自分の考えを広げたりまとめたりするときにタブレット等を使える」という児童を80%以上にする。	80%	85%	106%	A	74%	93%	B	○タブレット等を活用し、児童がアウトプットした学習を交流する場を創り、自分の思考や表現に広がりや深まりをもたせる。 ○家庭学習を量から質へ変換し、児童の学習の進度や認知スタイルに応じた支援やニーズに応じた自主学習のデザインを促す。 ○考えを「広げる」「まとめる」「深める」トピック教材を活用し、児童が自分で工夫し、他者と考えることを楽しむ活動を行う。	・「自分の考えを広げたりまとめたりするときにタブレット等を使う」という児童は93%だった。1年生は、タブレットに慣れる時期ということで集計をしていないため、2〜6年生の集計結果となっている。2年88.2%→95%、3年76.5%→77.3%、4年83.6%→80%、5年83.1%→88.6%、6年91.6→88.5%だった。 ・ロイロノートの使い方や活用方法について4回職員研修を行った。	・1年生に関しては、早い段階でタブレットに慣れるようにしていく。前期と比較すると学年によって若干増減が見られた。前期は、ロイロノートを本格的に使用していくことを目標に授業等で活用していたため、タブレットが使えると回答した児童が多かったのではないかと考える。後期は、いつでもどこでも使用するのではなく、ICTを道具として活用していく目標で、有効に活用できるように指導しているため、活用の場が焦点化され、若干減少した学年があると考えられる。 ・今後は、職員研修を行う中で、学年での使用活や実践を行っていく。児童が自ら使える場面を選択できるようにしていく。
豊かな心	社会規範を尊重し、所属意識を高める指導により、児童の自己効力感を高め、お互いを大切に作る人間関係を育成する。	生徒指導	社会生活に繋がる自律に向けて、児童の内的基準を高め、規範意識と公共心をもった行動を促す。	「お互いのことを考えて、行動する。」児童の割合を90%以上にする。	90%	87%	96%	B	83%	92%	B	○「社会規範を守る」基準を明確にし、児童の呼び方や接し方等、学校が公共の場であるという意識をもって指導に取り組む。 ○学年や学級で生活目標を設定し、児童が自らの成果や課題に責任をもち、学校生活を落ち着いて楽しく過ごせる工夫をする。 ○教職員のいじめに対する認識を深め、いじめを予防する授業を実践し、児童の尊厳の保持と人に寛容な土壌をつくる。	・「お互いのことを考えて、行動する。」児童の割合が83%だった。 ・i-checkの結果の分析を行う研修を1回行った。各学年児童の過去のデータと比較し、各児童の課題の把握に努めた。 ・児童への接し方やいじめを予防する学級風土の構築のため、生徒指導提要改定に伴い、校内研修を1回行った。	・社会規範については、各学級で取り組むとともに、生徒指導通信などを通して各家庭とも意識を共有し、学校・家庭両方から指導を行っていくことで、児童への定着を図る。 ・i-checkなど児童に関する情報を今後とも蓄積・分析していくことで、各児童の課題等の把握に努めることで、児童への理解を深め、落ち着いた学校生活を築いていく。 ・いじめに対する認識などは、生徒指導提要の改定がなされたばかりで内容の熟知・定着するには、まだ時間がかかると思われる。今後とも定期的に研修を行い、周知を図っていく必要がある。
			児童が主体の継続的な学級活動を通して、居場所づくりと絆づくりを進め、意欲と実践力を育てる。	月に1回以上、自伸会目標達成に向けて、自伸会執行部が具体的な取り組みを考案し、学校全体で実施する。	12回 前期6回 後期6回	8回	150%	A	16回	150%	A	○自伸会で、学校生活を楽しく過ごす行動や学校を笑顔にする行動等を行った児童や学級の取組を紹介する。 ○毎月執行部を中心に、自伸会目標を設定する。その上で、学校がよりよくなるための取組内容を企画し、話し合って実行する。	・毎月自伸会目標を設定し、その目標達成のために、11か月間で、18回の取組を行った。後期には各クラスの実態に応じた目標設定や主体性を引き出すために、目的に対しての課題(ゴール)を複数設定し、クラスで選択してもらう形式をとることが多かった。それによって、前期に比べて各クラスの自伸会への取組参加度が大きく向上し、効果的な企画になったと考える。 ・自伸会の児童自身が非常に意欲的に、自立して活動を行っており、行った活動に対しての肯定的な評価やフィードバックを放送や賞状といった形で全校に返すこともできていた。また、後期委員会活動では、先に委員長を募り、その委員長が学校のためにやりたいことを提示して、それに賛同するメンバーを募集する形で委員会を決定した。この方法をとったことにより、より積極的に委員会活動に取り組む児童が増えた。	・自伸会活動を子どもたちの主体性あふれる活動にしようと思った場合、6年生総合のスマイルプロジェクトをはじめとする、自ら企画を立ち上げて実行し、成功させた経験が必要になる。6年生に至るまでに、小グループで企画を立てて成功させる経験値があると、高学年での児童会活動が豊かになると考える。 また、委員会活動は、来年度も先に委員長を募る方式が効果的であると考えるが、教員間でその方法や効果について共有していないと、継続は難しい。児童が主体的に学校づくりに参画していく仕組みについて、研修を組んで教員で考え、共通理解を図っていくことで、より効果的な児童会活動ができるのではないかと考える。
健やかな体	継続的で個別最適な体力づくりの推進により、健康・安全で活力ある学校生活を送る。	体力	積極的に体を動かすことを楽しむ児童を育成する。	なわとびや体育の授業、外遊びなど体を動かす中で「自分の体力が向上している。」と思える児童の割合を80%以上にする。	80%	87%	109%	A	87%	109%	A	○新体力テストや体育の運動種目の個人記録を基に、自己目標を設定し、意欲を高め、体力の向上を図る。 ○年間を通して、授業前や業間の縄跳びやサーキットトレーニング等、個別に記録に挑戦するなど、継続して運動に親しむ。 ○タブレットや記録カードを活用し、児童が自ら記録への挑戦の仕方を選び変化や成長を他者に伝えるなど、表現力を高める。	・体育委員会が中心になって実施した縄跳びカードの取組は、意欲的に児童が多かった。また、体育の授業では、体力づくり充実事業が紹介した準備運動を活用したり、各クラスで鬼ごっこなどを取り入れた準備体操をしたりすることで、楽しく効果的な準備運動をすることができた。授業の中では、マットや跳び箱などを多く出すことで、より回数が増えることで運動量をあげたり、レベルに応じて挑戦したりすることができた。	・体育の授業や準備運動の交流をし、良いところを取り入れながら、意欲を高め、体力の向上を図る。 ・体育委員会によるなわとびカードが後期委員会の取組になったので、前期から企画し実践していく。
信頼される学校	働く人支援充実事業 学校・家庭・地域との連携を深め、十日市らしさと人間性を向上する学校づくりを進める。	教頭	学校の理念や児童の思いや活動の様子が伝わる。機動的で信頼と感動のある情報発信を進める。	保護者アンケート「学校は、教育活動をよく知ってもらったための取組を行っている。」と思える保護者の肯定的評価を85%以上とする。	85%	93%	109%	A	93%	109%	A	○HPの更新等取組を進め、学校評価では、保護者の肯定的評価が93%となった。学校便りは月1回以上発行し、保護者のみならず、地域にも情報を発信できた。また、Googleclassroom、ロイロノート等を活用して、学年・学級ごとの写真や動画等の公開も行っていった。一方で、学級便り等もっと発信してほしい、新たな生活様式に応じた新たな発信方法を模索してほしいという意見もあがっている。	・HPの更新等取組を進め、学校評価では、保護者の肯定的評価が93%となった。学校便りは月1回以上発行し、保護者のみならず、地域にも情報を発信できた。また、Googleclassroom、ロイロノート等を活用して、学年・学級ごとの写真や動画等の公開も行っていった。一方で、学級便り等もっと発信してほしい、新たな生活様式に応じた新たな発信方法を模索してほしいという意見もあがっている。	・マメールや学校だより、HP等活用して、適宜発信できるようにする。また、学級・学年便りの充実を図るとともに、その他のツールを活用しての発信方法(PTA公式LINE等)を、情報教育担当者と模索し、より連携を密にしていこう。 ・学校通信(学校便り・給食便り・保健便り)を月に1回以上、学年・学級通信や生徒指導通信を適宜発信する。 ・ホームページを月に1回以上更新する。 ・Googleclassroom、ロイロノート等を活用して、学年・学級ごとの写真や動画等の公開も継続して行っていく。
			教職員がお互いを尊敬し、対話を通して個の成長と組織の成熟を促す働き方を進める。	組織の生産性を高め、教職員が主体的に考え、交感しながら行動できる。	教職員が生産的な仕事ができていると感じ、自己受容し豊かに働いていると思える教職員を85%以上にする。	85%	87%	102%	A	86%	101%	A	○職場のエンゲージメントを高め、仕事へのやりがいやwell-beingを実現する環境づくりを進める。 ○教職員の在籍時間を分析し、物的・心的な生産性を高める働き方を組織的に支援する。 ○「頼を磨き」「対話を紡ぎ」「組織を繋ぐ」「働き方を宿す」研修を行い、組織開発と人材育成を図る。	・「何のために行うのか」「優先的なことは何か」と常に組織の在り方を見直し、「頼を磨き」「対話を紡ぎ」「組織を繋ぐ」「働き方を宿す」という観点で研修を進めていった結果、「学校の理念・戦略・方針等に対して、納得・共感をしている」職員が97.3%、「上司や同僚と良好な関係を築けている」職員が94.6%、「学校の仕事にやりがいを感じている」職員が86.5%となっており、職場のエンゲージメントが高まっている。働き方改革も推進し、組織的支援を進めた結果、在校時間が、昨年度に比べ月平均12時間14分短縮され、勤務時間外在校時間が月45時間を超える職員も月平均7.4名減少している。(12月現在)